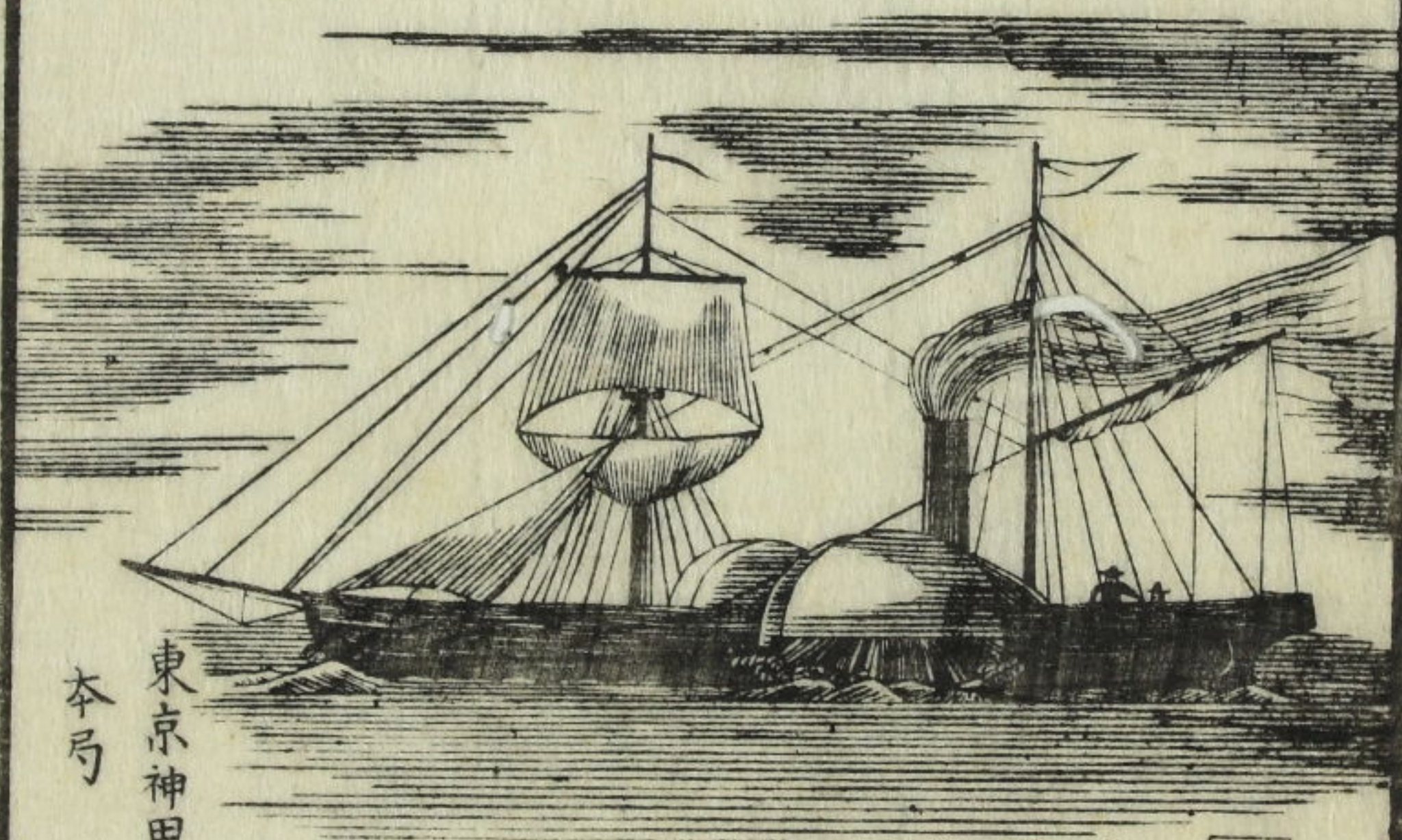


海外 各國 誌聞新譯翻

許官



東京神田區山町十五番地  
本局 信報堂

第三號

定價銀二匁五分

西垣文庫

文庫10

7380

2



特 文庫10  
7380  
2

内言

外国の新事多端にして日本に無用の事もあり故に多くの中より  
肝要のうぐのこを亜米加人ウヰリド英吉利人ウヰルムスの撰を我國  
行川一男翻譯を微細小同ひ度人本局へ来り給へ

毎月廿板 日曜日

但し紙数に限りは廿板の度一号に限りは文章の多  
少より二号或は三号も同時に出板し  
史價一冊 銀二匁五分 当時發行より先き前金と以て引受の向へ

二十部  
三十部  
五十部

銀四十五匁  
同六十三匁  
同百匁

西文庫



海外  
各 國

翻譯新聞紙第三号

二月一日發行

西曆一千八百七十二年十一月二十九日(サンフランシスコ)  
アリカノ 七日目毎の新報紙中(アラゼル)名の蟻の事を記せ  
し云

○(アラゼル)國に於て一種の蟻あり其數幾億万ふるとを  
知らず其徘徊する方々向ひふバ人を困る或ハ物を傷ふと多  
し其行路に當る人家ハ何れも家内の者立退くふり蟻家  
に入り飲食の品ハ盡く之を荒れこの蟻人の身体に攪簇  
ると其ハ甚だ危きとて若し近寄らんと為さば火を焚  
て其来り路を遮りれば僅く災害を免るべきの事或人コル

各 飛 躍 行 用 氏 卷 三

コバルト山に登りし時例ハうより数限りもふき蟻蟻高  
 ま山の頂さへ一條の路を作り此処の鉄道を横切りて山の  
 後ろの側らへ下るを見たり此蟻蟻ハ透間なく集り積りて  
 厚さ廣さ共々四寸餘程の蟻柱をふし其進み行との速さ  
 て驚く堪ざり此人々の登るより幾時先達て通行を始  
 めしや登りし後四五時の間ハ其数少くも減ゆる事なく  
 果べきとも見へば実々恐怖ろし其形容ふり縦然試み此蟻  
 柱の中を断つとも忽ち回復あり疑ひなく彼等天性に因  
 て各其行べき道路を知りしや只一條の路を行て少くも他  
 へ離散せざるふし人々能く心と附けざれば取囲まれて脱

る事を得ず此蟻蟻牛馬の死骸と見せせば僅う一二時  
 其肉を喰ひ盡して骨のいと遺すと云

同年十月二十六日(ロンドン)新報紙中々金剛石と堀  
 うとを記せし云

南(アフリカ)名洲に於て(ダイエモンド)金剛石と堀り人ハ  
 大抵(ハール)名川河辺の廣き野原より續きて(ラフンジ)名川河岸  
 (フレースター)名地の東北(テロポコルニ)名地境内に集り居  
 れり是等の河ハ岩石の大きふ片らを積あつり鉄色の細  
 うき砂を以て其積たゞり岩片の間々を填め塞ぎたる  
 長大き石橋多し石堀人共此鉄色の細うき砂の中より貴く

さ宝石と擇りやき其仕業極めて捷便ふり九三十尺四方許  
の地面を兩人宛の受持と一各日雇の黒人を使ひて石橋の  
岩片を取除一其間在る処の細うき砂を運びや一陸に於  
てハ簾を以て折け篩を以てふるひ水に於てハ洗ひよふげ  
砂砾と寶石とを擇り分け其寶石と杭の上へ並べ其内より  
金剛石を探りやき時としてハ更を得て其心旁空一き  
られ共又巨大ふる金剛石を得て大ひに辛苦を償ふに足  
事あり其使ふ黒人共ハ眼あり共更に知る者少く目前に  
れ共宝ふりとして掠奪ものふ一然れ共能々目を注げざる  
時ハ一裸を以て其日の惣人数を雇ひ得べき金剛石と盗む

るに有り云

同年十一月二十九日(サンフランシスコ)の新聞紙中  
に毒と用ひて流と去る法を記せしむ云  
毒と用ひて家産を除く三法あり其一法とフラスコ  
国の古法と称すパリニス都に於てハ此法を廣く販賣して  
生計をふきものあり其法一個の長筒を製し其底の真中  
稍高き処を作り水を入れて恰も水中に離れ鳴らすごとく  
コふし筒の口を堅く蓋をして此蓋の上より押す時ハ下へ  
開くべき辨を付け辨の真中を豚の肉或ハ乾きたる酪の如  
き荒の好み能く食する品を置く時ハ荒之と取んとして筒

登り辨の上<sup>ニ</sup>到<sup>リ</sup>ると云ハ辨忽ち開けて龍筒中<sup>ニ</sup>墜<sup>ル</sup>此  
 仕掛<sup>ル</sup>由<sup>テ</sup>一夜二十匹の龍を筒中<sup>ニ</sup>墜<sup>セ</sup>と得<sup>ベ</sup>一若<sup>シ</sup>水  
 中<sup>ニ</sup>鳴の如き高き水のふりりせば龍水を泳<sup>ギ</sup>翌朝尚死<sup>セ</sup>  
 ぞして活<sup>カ</sup>深の勢<sup>ハ</sup>ひら<sup>ズ</sup>べ<sup>シ</sup>然れども此鳴の如き処<sup>ニ</sup>あるを  
 以て墜<sup>シ</sup>龍ハ凡て死<sup>ス</sup>斃<sup>セ</sup>べ<sup>シ</sup>其故<sup>ハ</sup>如何<sup>ト</sup>ふれバ龍天性<sup>ノ</sup>  
 才<sup>ヲ</sup>以て自<sup>ラ</sup>身<sup>ヲ</sup>守<sup>リ</sup>護<sup>ル</sup>るとと知る故<sup>ニ</sup>墜<sup>ル</sup>と当<sup>テ</sup>各此  
 高き処<sup>ニ</sup>登<sup>リ</sup>溺死<sup>ト</sup>をさ<sup>ケ</sup>ん<sup>ト</sup>して互<sup>ニ</sup>争<sup>ヒ</sup>翌朝<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>  
 筒の内<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>ると云ハ最も強<sup>キ</sup>龍只一足水中の嶋<sup>ニ</sup>在<sup>テ</sup>他  
 の弱<sup>キ</sup>龍ハ悉<sup>ク</sup>死<sup>ス</sup>殺<sup>サ</sup>れ或ハ溺死<sup>シ</sup>て其回<sup>リ</sup>斃<sup>ス</sup>  
 と云<sup>フ</sup>第二の法と(ニウヨロク)アメの法と称<sup>ス</sup>其法腐<sup>シ</sup>蝕<sup>ス</sup>ポツ

トアス<sup>名</sup>葉<sup>ヲ</sup>以て薄<sup>ク</sup>龍<sup>ノ</sup>穴<sup>ノ</sup>周<sup>リ</sup>の縁<sup>ヲ</sup>をぬ<sup>リ</sup>置<sup>ク</sup>時ハ龍其  
 上<sup>ヲ</sup>歩<sup>ク</sup>む<sup>リ</sup>当<sup>リ</sup>て此葉<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>足<sup>ヲ</sup>痛<sup>ク</sup>を癸<sup>ク</sup>舌<sup>ヲ</sup>以て其  
 足<sup>ヲ</sup>舐<sup>レ</sup>バ口亦痛<sup>ク</sup>と生<sup>ジ</sup>然<sup>ル</sup>時ハ一家の龍地<sup>ヲ</sup>轉<sup>ト</sup>て  
 他<sup>ニ</sup>移<sup>リ</sup>去<sup>ル</sup>恰<sup>モ</sup>其同類<sup>ニ</sup>告<sup>知</sup>らせ<sup>ル</sup>者<sup>ノ</sup>如<sup>シ</sup>假令<sup>ニ</sup>此家  
 の近隣<sup>ニ</sup>夥<sup>ク</sup>龍<sup>ハ</sup>共決<sup>シ</sup>て入<sup>来</sup>ると云<sup>フ</sup>第三法を  
 獨<sup>リ</sup>逸<sup>テ</sup>法<sup>ヲ</sup>と称<sup>ス</sup>ホルラ<sup>名</sup>地<sup>ノ</sup>人の能<sup>ク</sup>用<sup>ウ</sup>者<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>其法教  
 足の龍を籠<sup>中</sup>に入<sup>レ</sup>少<sup>シ</sup>も食<sup>ヲ</sup>与<sup>ヘ</sup>ざる時ハ龍飢<sup>ハ</sup>餓<sup>ハ</sup>逼<sup>リ</sup>  
 りて<sup>テ</sup>鬪<sup>争</sup>と<sup>ス</sup>終<sup>ニ</sup>互<sup>ニ</sup>相<sup>食</sup>し強<sup>キ</sup>ハ弱<sup>キ</sup>を嚙<sup>殺</sup>し弱  
 きハ強<sup>キ</sup>を斃<sup>ス</sup>果<sup>シ</sup>ハ最も強<sup>キ</sup>龍の只一足遺<sup>ル</sup>の<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>  
 如<sup>ク</sup>為<sup>ル</sup>と数回<sup>ニ</sup>ふ<sup>リ</sup>の<sup>ニ</sup>こ<sup>ノ</sup>處<sup>ノ</sup>強<sup>キ</sup>龍の<sup>ニ</sup>と再<sup>々</sup>集<sup>ム</sup>

ハ其争ひ乱れ強弱相斃すの状前々異ふるをふくして卒に最強の鹿一足とふるべし爰に於て此鹿を籠中より免し放てハ已に籠中にて鹿の肉の味ひを覚へし故鹿を捕へ食せんと東西奔走して之を索む由て弱鹿悉く逃去りて家の内鹿の患を免るべしと云

○同ト新夕紙中々間歇熱を生ずる草を記せしと云  
(ボルストラ) 人の説く池沼の水を検査すれば其水腐敗する後從て顆粒状の草を生ず是ハ顕微鏡を以て見れば見と得べし此草の生ずるときハ水必らば黄色がりたりと云  
緑色にして透明且極りて微細なる草を菌へ生ず是即ち間

歇熱を起すべき毒草にして常に水面に生ひ立ち嫩弱き時ハ其色虹の如く之を見るに恰も油を水面に滴らせしものごとふらば氣候寒き節ハ生ひゆるる稀なり假令生ずるとも其育ち極りて遅くや、温暖氣候に向ひ日の影を晒さるる時ハ其生育早くして水中泡沫を生じると至る(ボルストラ) 氏池沼検査の間々此毒草の爲に間歇熱を患ると数度及と云

○同ト新夕紙中々(インジアン)のアメリカ人の形勢を論じて云  
(インジアン)と支配する所の合衆国の面守官よりの書状と云  
今(インジアン)人を治むる政事ハ從來採り用ゆる処の

法とハ殊ホリ(インシア人ハ元來強暴ふるを以て大統領  
 (ダラント)名氏より号令をヤ一政事を一改革して此強暴を  
 取控へべき備へを為し抑々此の如き土人を心伏せし  
 むろの良策ハ絶へば兵隊を備へ置たり彼等政府の命令  
 に従ハざる時ハ之を以て威し従順へハ布告しざる善政  
 由て貧窶の難を免るゝのふらけ何事も弁へぬ者共故  
 知らば一て犯す罪過をも悟り免るべし兵威を以て土人  
 を治むるハ暴に似たりと雖ども此地に於て其強暴を制止  
 開化し赴くしむる甚多し強暴ふる土人ハ只政府の命令  
 に従ハせ而して後始りて文明に赴くと得べきあり若し今

属し後ふ処ふ土人の有りて政府は従順せば政府も従来  
 従属する処の順良の土人と同し良政を以て之を治むべし  
 此の如きに至るハ実ニ政府の願ふ処あり(アメリカ西方に  
 在る土人の絶へば文明の諭しを受るを以て日々開化の域  
 へ進歩を是る由て之を推し能く諭し能く導びき政府も  
 随順させふ如何なる無智強暴の土人と云とも亦文明に  
 進むも必然ありと云

○同年十二月十三日(サンフランシスコ)新報紙中云  
 (フランス)国に於て当時入牢せる罪人の数を檢りし男一  
 万人女五千人ありと云

○同年十二月十三日(サンフランシスコ)新夕紙中(イタリヤ)国洪水ハまはしく盛んまりて再び(ポー)川の堤防を壊り国内一圓満水及び数多の橋并人家を押流し国民莫大の家財を損亡せしと云

○同年十一月十六日(ロンドン)イギリス都新夕紙中(アメリカ)国(ポストン)都山火の事を記せし

○去る土曜日夕七字半過ぎ(ポストン)町の(サンマーストリート)町と(キングスストリート)町の境ひに御影石を造建する大家の器械置場より発火し楼上に移るや否や速り家棟へ燃へ抜しう人々大に嘔唄へ初りハ風も穏う

ふりーダ俄々西北の風烈しく吹き火ハ此家の内を積りてころ荷物に移ると共に御影石ハ破裂し其音凜とく近寄る能げ火ハ(サンマーストリート)より西北へ廣がり又東北へ燃へ涉り翌日曜日の曉第四字迄二十二棟焼失きこの地方凡六十(エーグル)一エーグルハ我四十一町四面の地を云ありりして(サンマーストリート)町に於て入江の辺りより(ポストン)コンモン同まで凡一(マイル)の三分の一まで夫より一(マイル)の四分の一餘北東に漫りウ井ニスロープスクエーヤ(町)フラシクリンスクエーヤ(町)ビーブスブロック(町)フランクリン(町)デランシヤ(町)フエ



デラル<sup>日</sup> (ハイキングストーン<sup>日</sup>) (アッキンソン<sup>日</sup>) (ウ井ルレム  
 ス)<sup>日</sup> (リンコルンアーチ<sup>日</sup>) (チニス<sup>日</sup>) (ニヤンセイ<sup>日</sup>) (ハヲレイ  
 其外近傍の町と焼き火ハ増々盛んかりーウバ(ポストン<sup>都府</sup>  
 人の畜ひ置ける馬ハ何れも火災ハ快ろき狂乱一荷物運送  
 用ゆるる能ハズ(ウナルセステル<sup>日</sup>) (プロウ井デンス<sup>地名</sup>) (ニ  
 ウヨロク<sup>都府</sup>) (ヲールリグア<sup>地名</sup>) (ローエル<sup>日</sup>) (リーニ<sup>日</sup>) 等より  
 (ホストーン<sup>一</sup>) 教多の馬を送りー由て各々之ガ為メ家財を  
 運ぶと得り月曜日の朝弟七字ヲ至り火ハ次第々北方  
 へ廣がり(デランシヤーストリー<sup>一</sup>) 名町及び(コングレツスス  
 トリー<sup>一</sup>) 日より(ヲータルストリー<sup>一</sup>) 日迄燃へや尚止まば

ステートストリート<sup>一</sup> 日一焼け行キ郵便局附属の建家も焼  
 落ちければ両替店ハ通用貨幣紙幣を安全の場処へ運送  
 此火を消防人為メ多くの家并ニ電信機を打倒し漸やく鎮  
 火ニ及び此火災地方九七十(エークル)焼失せしが既メ人家  
 も処々建ち電信機ハ(ニウヨロク<sup>都府</sup>)より新々取寄せ却  
 て其前よりハ美廉ニ再建せり 故メ(アノリカ<sup>日</sup>) 国日々新々  
 放火ハ市中の掃除人ニ均トキもの也と云  
 ○同年十二月十三日(サンフランシスコ<sup>日</sup>) (アノ)の新々紙中  
 支那国と海外諸国との交易年を追て盛昌ニ赴くを記せ  
 一と云

各飛昇月氏 卷三

支那国年と追て海外諸国と交易商法を盛んせり其交易  
 をふり諸国の内にて英吉利との交易を最も盛んふりと  
 其次ハ合衆国然れども合衆国と交易し輸りやを品物の價  
 と英吉利と交易し輸りやを品物の價と較れハ僅うは五分  
 の一に過ぎざば一千八百七十一年の内ハ海外諸国より支那  
 へ輸り入れし品物の價九千八百万(ドル)にして支那より  
 諸国へ輸り出せし品物の價九千二百五十万(ドル)にふり  
 一千八百七十年に比しバ二万(ドル)を増せり又(アノ  
 リカ)より交易の爲に支那へ赴く船一千八百六十九年ハ船  
 數百六十五艘積荷二百七十四万六千五百十五(ト)に一千八

百七十年ハ船四千五百四十七艘積荷三百四十万。〇七百  
 四十六(ト)に千八百七十一年ハ船四千六百艘積荷三百八十  
 七万。六百四十三(ト)にして年々其數増加し一千八百七  
 十一年(イギリス)より到る船ハ七千六百六十艘にして其積荷三  
 百三十三万。八百八十一(ト)に(セルマシ)国より到る船ハ一  
 千四百八十艘にして其積荷四十二万八千六百四十七(ト)に  
 及ぶと云

○同ト新テ紙中ニ橙を培植する法を記せし云  
 橙ハ極りて堅き樹あり(サンジヨス)地ニ於て寒さ強く夜中  
 一寸許りの氷を結ぶ頃廣く植し橙を別く手当もせざり

一が曾て傷む色ふ一此地に於て橙此の如く幸福の形状ハ  
 夏日暑さ甚ぐ軽きが為る夏中カウをつと一之を手入れを  
 る一由れり(サクロメント)地の如きハ寒さ強くと金にも復  
 の暑さ亦烈し故に橙を植て能生長す土人少く心を  
 用ひて夏中能手入せば冬の寒さ手当を為の苦を免る  
 べ一丸橙を植るハ家并に塙等の南側に植へ根の周りに  
 有る土と絶て交ぜるへ一度々水をやりて復中怠りなく手  
 当を為一十分の生長を得せしむれば如何なる寒さと金も  
 必し傷む事なくと云  
 ○第三号の地なる  
 (ロンド)の夜景の續き八弟四号巻首に述ぶ

